「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」
ヨハネ20－21

発行　徳田教会
（広報委員会）
No. *296*
練馬区豊玉中1-39-1
TEL（3991）2101
FAX（3948）3228

主な内容

・被災地ボランティアからの報告
・宣教協力体3教会だより
・「教会のパイプオルガン」その2

あの日から一年　二〇一二年復活祭を迎えて

じょにー・おおくら

東日本の被災地が未だに修復をみないなか、復活祭を迎えました。「ご復活おめでとう」と口に出しても、愛する親、兄弟、夫、妻、そして子ども、友人、家、畑、船、職場などを失った人々のことを思うときとても心が痛みます。

被災地にも春がやって来ました。彼の地にも野に山に、海に新しい生命が次々に芽生え出しています。しかし原発事故によって汚染された地域一帯、そこに住んでいた住民たちはまだ冬の最中のままです。この苦しい状態が何時まで続くのか私たちには分かりません。愚かにも私たちは二度の原爆による被曝被災、更に水爆実験による被曝を受けたことを忘れ、日本政府と御用学者や電力会社による安全神話に騙されていることに気付かず、豊かで便利な生活を享受してきました。チェルノブイリ、スリーマイル島の

原発事故が起きても、日本の原発は安全だと思っていました。しかしあの日東京電力福島第一原発事故が起きてしまったのです。

放射能に汚染された瓦礫や土の中から、そして被曝棄民の声は十字架上の「わたしの神よ、わたしの神よ なぜわたしをお見捨てになるのか。なぜわたしを遠く離れ、救おうとせず呻きの言葉も聞いてくださらないのか」というイエスの声と重なります。

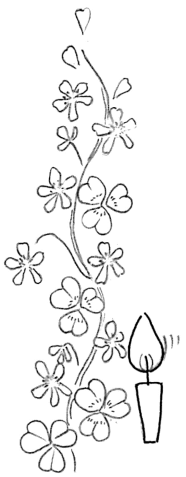
フロジャック館の本棚に「かみさまへのてがみ（More Children's Letters to God）」という絵本があります。この小さな絵本は十五年間も読み続けられてきたロング・ロングセラーです。訳者の谷川俊太郎はまえがきに「おとなとちがって子どもは権威にたよりません。直接に自分の心をのうちの神にぎもんをぶつけ、訴えかけます。そこは宗教的な感情ばかりでなく、科学的な好奇心も、もってひろく人間に対するいきいきとした関心もかくされていると思います。」と記しています。

絵本の中で、ジーンという子はかみさまに「ひとを しなせて あたらしいひとを つくなきゃならないなら かわりに いま いるひとを そのままにしたら どう？」と書いています。三月一〇日の東京新聞のコラムの「筆洗」はこの文を引用して「大震災による夥しい数の犠牲者とは、誰かのかけがいのない人だったはずで、そう思えば、この少女の〝提案〟が、どうにも切なく胸に迫る。」と書いています。

復活祭を迎えるいま、被災地からよい便り（福音）も沢山伝えられてくるようなりました。明るいニュースを昨年の復活号に載せましたが、一年後の復活号に、別の良き便りを新聞から拾って、イースターの「福音」として締め括りたいと思います。

「あの日生まれた長男、一歳のお祝い」（二〇一二年三月十二日毎日新聞朝刊）

気仙沼市の会社役員、村上英樹さんと妻利恵さんは十一日、長男暖（はる）ちゃんの一歳の誕生日を祝った。両親は地域の伝統行事「一升餅」で健やかな成長を祈った。大きな餅を風呂敷で巻き付けられた暖ちゃんは転ばされると、大声で泣いた。足を踏ん張って立ち上がり、再び歩み出した。

暖ちゃんは昨年三月十一日午後二時一分、気仙沼市立病院で生まれた。その四十五分後、強い揺れが襲った。防災無線が大津波警報の発令を伝えた。家は津波にのまれた。市立病院は被害を免れ、避難者が押し寄せた。停電で暖房は動かない。利恵さんは廊下のベッドで夜を明かした。

利恵さんは、わが子の成長に目を細め「健康に育ってほしいと願うだけです」と語る。英樹さんはこう話す。「いつかは、自分の誕生日にみんなが悲しんでいることに気付くでしょう。その時には、生まれた日に何があったのか、教えてあげたい」